

今日学校の或りりそホトトギスを買つて古き本「聖
業の巻」を續かすじのた新年飾の大依なるた
いた家の中そ来るも又、黄下か、ホトトギスが照
りるこあつた

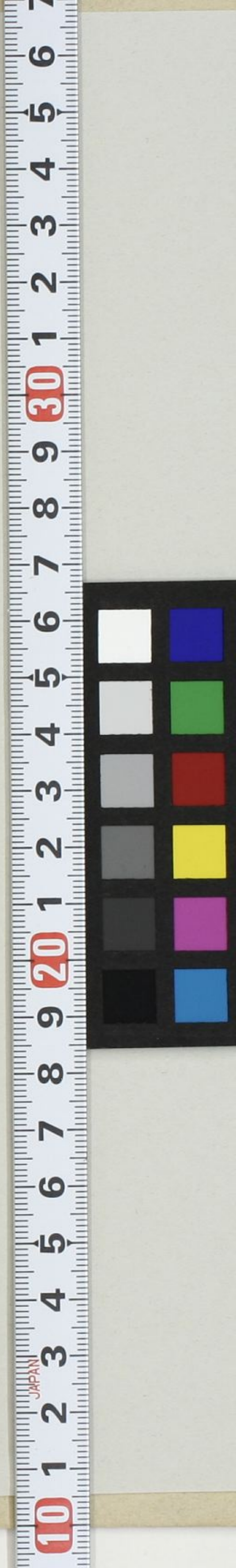
今日か 今かも待つていた馬「木」が一冊も来たさ、ホト
トギス二冊が並を針春あ、見舞つたの、小巻に心
説を伴ふ、天啓か知れぬ、小巻も久きあかぬ、況
わ実にはりなかつた、こも暇がないかと、アキラ
メて、持った「聖業の巻」を又、又、興が起つて来た

は方がない

以端昔の實にふりく載いた神品とあらべしだ
古代の元旦に巻いた椽に思われ、永久保存美
すべし

かえりぐも馬「木」の元旦に見ふんあつたを、
怖しむ、ど、神ですか、早く送つて戻さな
い、実に早く見たそ、溜か、尤も、おれ、おれ、

手、するか、知れぬと、思つて、
つ、聖業の巻、は、徹、徹、尾、純、潔、を、知、る、年



一、此の未だほかに徹頭徹尾純潔な少年

少女の名を何やらその少年を主人のうて招いた
何れもその主観的な先入観を以て母を以て持
たが所謂学生を基礎としてその上の一歩
を世のそとと男う 殊にはじめは二人のタウ
ナイ情緒の如く印時代か 祝さすはじめてその印
の成熟期を是期の経路が極く深刻にたつて
リと所に依る者の苦心があらうし、これ大抵は
於ては夫存在ない只二人者此書に取った材料が
甚だ自然である代り二人の動機を著表する

今所が少年におおしたくない際が多々ありゆせ
ぬが、男ふ 十代の少年にわ おせたら口調が文つ
てある 併し、此の小部、女の同題乙

名の敗滅―破裂 これわむしる音通
である 描写が大にあり、い、小生ゆ二を述べんだ
が、ここにきて逆した 仁村の家あつた時向ふ
の西親の顔を見見た時の瞬間の情緒を
今つと目激にして取りなかつた 小生の實際
を基として中すが 死者の親身の人になつた

結構に、
ところ、
ある、
の、
に、
を、
あ、
て、

3

時、
矢、
の、
あ、
り、
く、
二、
三、
の、
あ、
ら、
い、
こ、
の、
時、
の、
あ、
ら、
い、

折返

二三の待つてくれむ一
今も送る

西向きの一室に半片披見か

今年も餘日なく感慨多し存せ

明治四十四年のめく濃く厚く重く

彩られたる一年は小生の左めに想ふに

仰前よりて或は殆後なる一一生

を世に享くる今後幾年ぞありて

小生も斯のめきの志意を興ふるの年

想ひ見る能はる也 時過ぎ物改

る見よ一年ハ斯くしておに思ひ

んとするに非ぢや 苦むむのたぶ

もの悲むむの樂むむの皆等しく

この運命の手も運命はつと移り

と交り走るを想へば宇宙の真諦

は汝に吾人の捕捉を容すたるの觀あり

感謝して可なるかを知らば悲痛して

可なるかを知らば 只吾人の心に沁む

深きものを抱いて永久に消えおらんを

冀ふ 千雷一萬翼す 生の假

たるやを知らば 死の歸たるやを知らば

只心の底に必み徹る深きものを抱いて

生を通り死を通り永久を通りて

吾人の雷を托せんを思ふ斯のめき也

只心の底に必み徹る深きルのを抱いて
生を通じ死を通じ永久を通じて

吾人の霊を托せんを思ふ斯のみき也

三月末日孤影松授り糸の冬林に抱ひき
今眼を閉れば樹々皆眼に立り瘳せたる

木鮮かなる苔 それに咲くべき花

夫れ等の色は二年間予の霊界を
治かめたるの色なる可 永久永劫

忘る可らざる也 一朝林を去って境
を越れば林と苔と花と已み我を

去れる也 然り去りたるハ只形のミ
木の霊苔の霊 花の霊ハ常に

予を去る可らば 永久に去る可らば

永知り去る可らば 霊の不滅は斯の
如き意味に於て只尊一 予は

霊の不滅を信ず 固く信ず 予は

充実せる一年なり一哉 感謝す
涙を以て感謝す

枯梗の糸は義変轉を經る也彼の林は
永久に予の脳裡に静かなる也

以ては十年ハ實に有難く公尊の一年
であつた 十年といふ名をも忘れ

あこがし

3 (終)

明治二十五年も必去人子孝祈なる

一きを思ふ 何の故かを急ふ心 只孝

福の意義ハ 俗界の意義と異る

のこ

明治は十五年も必去人子孝福なる
一きを思ふ何の故かを念ふに只孝
福の意義は供界の意義より異なる
のこ

風邪大切すすー 気を付けられたい
南平林へ頼んでハハ仰 寒くて
困ららう 炬燵の火は保山ありや

今年も今半月のミ 早く帰って
両親の顔を見せよ親の在るは
側るゴロト心 病むな

貝合 悪く寝ておごー 沢渡
子非お 体を悪くして何なる
教育もへちまもあじものか

長塚節 名喉頭結核よて入院
困り入りト 皆弱くて困りト

か生大に 健康日おびとをい
けろ送りー 秋ハこんな志トありや

いおひの 秋ハ 牛屋を興る出たる秋也
どの秋が一お骨よかりト哉 今サー
永くもいでの名せりたれあはは 遊佐
を行つぬ一 十二月十一日 遊十一日 三十分
柿人生

源江部玉川村

小生大ニ健康ニ成ルニトスル
 付万送リ一秋ハこんな志トありや
 一おひの秋ハ牛屋を具ひ出ルたる秋也
 どの秋が一おひよかり一秋今サ一
 永くもいでのあせりわくは通化
 を行つぬ一十二月十一日三十分
 柿人生

オク

源江郡玉川村

又保田俊彦
 二月十日
 出

月井村



東筑摩郡
 廣五村小学校

中京岡古打
 出
 行

一昨夜左翁と共に将定

昨日左翁を送りて上スリ候

車村よりきはる心志津現

一昨夜左翁と共に舟定

昨日左翁を送りて上スワ後

車坊よりきはる心志津見

又お条と共に布半一泊

今夜左翁は

左翁一通るの事之が二通

事とあり急ぎのため朽木

はだかへとお成り貴(感)

か

杖蘇旅行は余紀面

白く且之ん岐蘇の風

累に梅甚とせば南木

雪にりくづく岐蘇の人

情を梅せんとすつものさ

北木曾を討いさるへんを

南共の分畧は福島可

ちりし存ゾハ心のちせつ

女しん雄偉なる水の

ちりし存ぶらむ心のたせつ
うぬしと雄偉なる水の
清冽日本を双なる樹木
森林のそとを藏なるうの
三者の特徴が木曾の風
景より作つて所りゆ
ち―それ木曾の人
又子至つては敷の敷なる
もの今世子於て也み多く
梅―新しき春来少女
此がために^抑道の端をすたて
くも其蓋を着せしめ
たるくもぬまそ随分祀
鏡を打つるのあり況や
連日の雨岐路踏み入
てけに雲霧の旅佳の
殊に爽快を助けたる者
あるに於ても
死せぬ、作らむ
三津尺のりさりと徳
解るる日三津

三津尺のりざりも徳
鮮 若きん日三津
不牽ひし際長松と糸人
未りしと牽ふる終る気
の妻の毒りたりとや
みしと新中社の才ま
約束の時馬を待た
りしと未らば仕才なり
とわしおろしと三津と糸
甲流分気候者故あり
子ありんし併し長松
尺の妻用は糸とぞん心
たし不却木ナカラムとた
新とやせしとたり
安んじり之を
神 経衰弱は遠足
散歩に限る旅行に
限る家おしてがた
思ふ可尤も不可
ウマキ者を食ひ運動
するが中下おどし尺の

ウマキ若を食の運動
するが中下所ども其の
オヒマの以一交出
共い小洗りもでも会
すぶく

うおき禱を作んまじ
苦心一玉ふな感懐
を望食の回出せば何
う自出の法出さじ

イラ立チテモ何の功
な人重短イケド
も長イコ

望月又病免の月
少生よりは大い疎者
わ 淨きまの文

張谷免子の瘵小養の
一と思ひの精神療法

とふ可あり 医道あり
ひまは力二のしもの煩
恩大禁物之強大
なるを起を以てすれば

恩大禁物之強大
なるを起を以てすれに
同先生ノ病犯は
七年を文へしに
たや 刃のめすは心
真底からの勇猛心
大勇猛心を振起す
病免のめすは自起消
滅あり 僕の病免
が害ヲナサヌハ妙少この
般の消息ヲ存ス
と自 伝はし
今日午右歸宅 今夜久
振りまえ少 際つ
了むまつぬわ

六月廿六日 初
夜 走

二兄

了如...
...

六月廿六日
長 物 走

二兄

了...
久保田俊夫
...

東亞麻部島内村

胡桃津曲内様
望月光男様

